

[月刊] キリスト教書評誌

本のひろば

出会い・本・人

ペスタロッチャーへの共感 阿部洋治

本・批評と紹介

マリオ・エスコバル 著／八重樫克彦、八重樫由紀子 訳
教皇フランシスコ 兼子盾夫

リチャード・ボウカム 著／山口希生、横田法路 訳
イエス入門 小嶋 崇

王文明 著／松谷暉介 訳

王道 朴憲郁

深井智朗 著

神学の起源 田上雅徳

J・グニルカ 著／矢内義顕 訳

コーランの中のキリスト教 戸田 聡

L.S.カニンガム 著／青木孝子 監訳

カトリック入門 岩島忠彦

W.J.エイブラハム 著／藤本 満 訳

はじめてのウェスレー 岩本助成

大木英夫 著

人格と人権

キリスト教弁証学としての人間学 下

近藤勝彦

川田靖子 著

我はまことの葡萄の木 森田 進

オードリー・サンスベリー・トークス 著／
松平信久、北條鎮雄 訳

二つの日本 渡辺憲司

河合裕志 著

イエスの言葉100選 朴憲郁

シュライエルマッハー 著／松井 睦 訳

信仰論 下巻

第一分冊「キリスト論」 倉松 功

上林順一郎 監修／かびばら マンガ

教会では聞けない「21世紀」信仰問答I
徳善義和

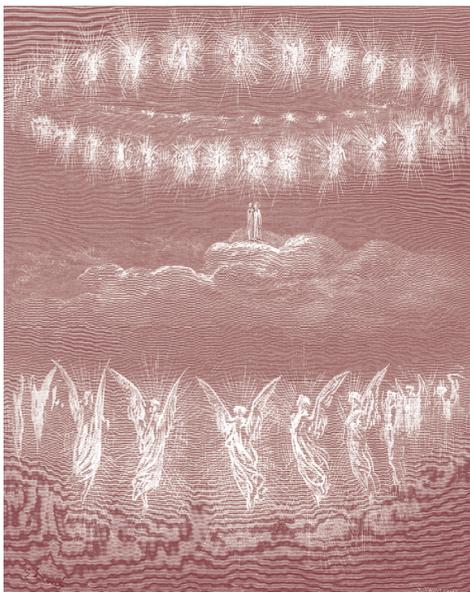
竹内 皓 著

フィンランドの木造教会を訪ねて

清重尚弘

既刊案内

書店案内



10 OCTOBER
2013

危険な旅

天路歷程ものがたり



ジョン・バニヤン著 / 中村妙子訳

【つづえ文庫】



ピューリタンが生んだ宗教文学の傑作『天路歷程』。真の救いを求めて様々な誘惑と試練に遭いながら危険な旅を続ける人間の姿は、私たちに大切なことを訴えます。「聖書の次によく読まれた」と言われるこの古典を子ども向けにわかりやすくダイジェスト。

◆小B6判・定価1050円

祈りの意味

H・E・フォスディック著 / 斎藤剛毅訳

名著復活



祈りの指針として100年近く読み継がれてきた名著。豊かな聖書の言葉と、古今東西の信仰の先達からの引用が、縦糸となり横糸となつて、祈りの何たるかを深く究め、祈りへと促す。著者はバプテスト派の神学者、名説教者として活躍した。

◆四六判・定価2940円

イエス・キリストの生涯

小川国夫著 まえがき 加賀乙彦

信仰者の眼差しと文学者の感性を通して福音書を読み解き、自らの信仰告白として語った珠玉のキリスト伝。

◆四六判・定価1995円

いのちの糧の分かち合

山口里子著 いま、教会の原点から学ぶ

イエス運動にさかのぼり、聖書を読み直し、聖書に隠された声なき声を聴き取る、目からウロコの励まし書。

◆A5判・定価2310円

教皇フランシスコ

エスコバル著 / 八重樫克彦、由紀子訳

話題の評伝 ◆四六判・定価1470円

偽名書簡の謎を解く

学著 パウロなき後のキリスト教

第二パウロ書簡 ◆四六判・定価2310円

渡辺 禎 雄 聖書版画展

生誕 100 年記念・『聖書版画集 くすしきみわざ』出版記念



2013年9月30日(月)～10月12日(土)

お茶の水クリスチャンセンター5階 / tギャラリー

11時～18時 (10月6日[日]は正午開場) ※版画作品の一部は販売いたします。

日本の伝統民芸である型染版画の素朴な美と、深く篤実なキリスト教信仰とが結びついて、独自の表現世界を築き上げた渡辺禎雄 (1913 - 1996)。その生誕 100 年を記念し展覧会を開催します。

主催: いのちのことば社 後援: 新教出版社 協力: ギャラリー間瀬



出会い・本・人

ペスタロッチーへの共感——阿部洋治

今、日本の若者の知性の質が問われている。大学に入っても学ぶ意欲がない、指示待ちで自分から仕事に取り組む主体性が欠けている、コミュニケーションができない、新しいことにチャレンジするヴァイタリテイがない等々といった批判が若者たちに向けられている。文科省は教育再生と称して、大学教育の改革をはじめいろいろ策を講じつつある。しかし若者のこうした問題の根本は何か。その掘り下げが十分ではないように思う。

私は、数年前まで、大学で幼児教育を目指す学生たちとしばしばペスタロッチーに心を寄せて来た。特に、『隠者の夕暮れ』（岩波文庫）について情熱を込めて学生たちと語り合ってきた。その冒頭でペスタロッチーは人間の本質をなすものは何かと問う。人間が本当に必要なものは、人を向上させ、強くし、品格を高めるもの、もしそれがなければ人を卑しくし、弱くするところのものは何かと問う。彼によれば、「心の奥底における満足」がそれであって、人間の諸力の発展はまさにこれにかかっていると力説している。

今、日本の若者たちのことで人々が批判する問題は、ペスタロッチーに沿って言えば、まさに「心の奥底における満足」の欠如から来ていると言わなければならないのではなからうか。ペスタ

ロッチーは今日的な問題を洞察して次のように記している。「学校の人為的な方法は、急がずに時期を択ぶ自由な自然の言葉の順序をもすればむりやりに駆り立てようとするが、こうした方法は人間を教育して、内面的な本性の力の欠乏を覆い、そして現世紀のような浮薄な時代を満足させる人為的な虚飾的なものにしてしまふ」と。

ところで、女子聖学院についての私の第一印象は「ここには豊かな『心の生活』がある」ということであつた。追いつめられ打ちひしがれる学業生活だけでなく、自分の心の声に耳を傾け、時には喜び、時には憂い、時には笑い、時には涙することのできる『心の生活』がある。生徒たちは学院生活の中にそれぞれの居場所を見出し、自由を実感し、その時々にながめる空気を思う存分吸い込んで生活をしている。自分の心の声に耳を傾ける。『心の生活』があるから仲間との心の共感が生まれ、心響かせ合い、仲間への尊敬と思ひやりに満ちた秩序のある共同体ができる。こうした中で生活する生徒たちの内面に輝くみずみずしい知性、人間としての気品と品格、生への力に満ちた意欲（ヴァイタリテイ）を実感しながら、ペスタロッチーへの深い共感を禁じ得ない。

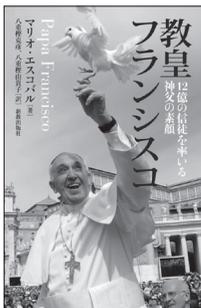
（あべ・ようじ 女子聖学院中学高等学校校長）

鉄の十字架を下げた教皇フランシスコ

マリオ・エスコバル著
八重樫克彦、八重樫由紀子訳

教皇フランシスコ

12億の信徒を率いる神父の素顔



兼子盾夫

新教皇は就任直後の第一声で「奉仕の精神こそが真の力です。教皇はみなさまに、とりわけ最も弱く、最も貧しく、最も虐げられた人々に任せてまいります」と高らかに宣言された。その首には通常、教皇のつける金の十字架の代わりに、彼が昔からつけている「鉄の十字架」がぶら下がっていた。「最も貧しい人たちに、(仕えられるためではなく)仕えるために来た」という言葉は、なによりも明確に新教皇の立ち位置を表している。

いまや世界のカトリック信徒12億の頂点に立つ新教皇(G・M・ベルゴリオ神父)だが、三月一日に教皇に選出されるまでは部外者にとってはほとんど無名の存在だった。その教皇が選んだフランシスコ(歴史上初の教皇名)という名前に籠められた意図は何だろうか。素直にそれを読み取ろうとするなら、一三世紀初に「私の教会をたてなおせ」という神の声を聴いたアッジジの聖フランシスコに倣う「清貧、他宗教に対する寛容の態度、なにより虚飾を排し徹底した改革の必要性」をアピールする姿勢だろう。

この本の帯には「日本語で読める初の評伝」と記されている

リークス・スキヤンダル(聖座内情報漏洩)は前任者ベネディクト名誉教皇の退任の意思を予想以上に早めたかもしれない。その他にも北米やヨーロッパの聖職者による児童性的虐待の解決も終わってはいない。先進諸国における多様に変化する婚姻のありかた、生命の始めと終りにおける医療倫理のアポリア、そして各地で火種となっている宗教間の争いの対話による解決の促進、しかし教会の直面する最大の問題は「信者数・聖職者数の減少」だろう。日本の信者数も高齢化により、じりじりと減少の一途を辿っているが、ヨーロッパにおける急速な世俗化による教会離れは深刻である。世俗化の浸透とともに教会を去り、散りじりになった迷える子羊たちを主のもとに連れ帰るのは容易なことではない。カトリックから他の宗教に転向する者もいる。かつて(一九世紀末)ブラジルは九九%カトリック国だったが、いまでは六四・六%にまで落ちている。さらに深刻なのは、ヨーロッパにおける聖職志願者の減少である(信者数の増加と相関し、しかしこれはアジアやアフリカという他の大陸が補いつつある)。これらの難問の解決はどれもみな容易ではない。

前任のベネディクト十六世が自らを選出したコンクラーベでの真摯な祈り「それだけは、おやめ下さい。私より適任者がい

が、じつに時宜にかなった翻訳の出版である。カトリック・プロテスタントを問わず、キリスト教信者ではない日本の多くの人たちにとつて新教皇の素顔はどう映っているのだろうか。新教皇はどういう方なのか。新教皇はどういう姿勢で教会の改革に臨もうとされているのか。南米のアルゼンチンにイタリア系移民の子として生まれた教皇の生い立ちから、教皇に選出されるまでの聖職者としてのキャリアーの各ステージにおける「飾らぬ素顔」を、この本ほどわかりやすく魅力的に述べている本は他にない。

欧米における教皇の影響力は、日本の国内においては分かりにくい。スターリンはかつて「教皇は何個師団の戦車をもつているのかね?」と尋ねたと言われるが、たとえ現代における教皇の軍事力は皆無でも、信仰の最高の指導者としての影響力は大きい。教皇が世界のカトリック信徒の道徳的・宗教的行動に与える影響にはじつに多大なものがある。それ故にまた教皇の担う責任も計り知れない。

バチカンには現在、かつてない深刻な問題を抱えている。バチカン

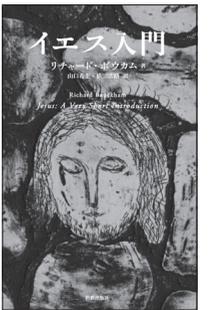
「私たちに馴染みの少ない「コンクラーベ」についても、この本はかなり詳しく伝えていますが、最後に新教皇のユーモア精神にも著者エスコバルは触れている。即ち「コンクラーベ」直後の枢機卿たちとの晩餐の席で、教皇は「あなたがたがなさった(自分を教皇に選出した)ことを、神様が赦して下さいますよ」と述べた。その時の教皇がどのような顔をなさっていたかについては残念ながら著者は何も書いていない。

この本によると、教皇はどのような階層の人とも分け隔てなく接する方であること、他人に対する思いやりの人であることが分かったが、それだけではない。厳しと同時にユーモア精神のある方だということも伝わってくる。

(かねこ・たてお)上智大学キリスト教文化研究所客員所員
(四六判・二三四頁・定価一四七〇円(税込)・新教出版社)

最新研究成果が豊富に盛り込まれたイエス像
リチャード・ボウカム著
山口希生・横田法路訳

イエス入門



小嶋 崇

某教団の教師検定試験では「イエス」と呼び捨てではなくちやんと「イエス様」としなければ減点になるという話が、つい最近ツイッターで話題になっていた。また、最近の本ではないが、石橋久子『キリスト教、知っていますか』（いのちのことば社、一九八九年）の「神にして人なるイエス・キリスト」という章にはこんなエピソードが紹介されていた。

「ぼくは牧師の息子なんだけど、子供のころ、イエス・キリストという方は桃太郎や金太郎のような、お話の中に出てくる人物かと思ってたんです。学校で歴史の時間にイエス・キリストの名前がでてきた時は驚きましたね。ひよっとしたらこれは、いつも教会で聞いているのと同じ人かと思ってね。」
どうやら日本の（プロテスタント）キリスト教の環境では、「歴史のイエス」を探索しようとする高い壁にぶつかってしまふようである。

リチャード・ボウカム教授の『イエス入門』はそのような壁を取っ払い、知的に誠実でありつつキリスト者をより実質的な「敬虔」に導く最良のイエス入門書ではなからうか。本書の

というテーマがどのように展開され、それがなぜ最後にはイエスの死に至ったのか、という歴史の出来事の内的論理展開を明らかにしようとするのである。さらにそのような死を遂げた「自称」メシアの死後、キリスト教というイエスの弟子たちによる運動がなぜ成立しえたのか、という非常に大きな歴史的問題までも射程に入れていっている。そういう意味では、高度な入門書と言えなくもない。

二、三この入門書の興味深い点を挙げる。いずれもボウカム教授の専門的研究の成果が反映されたものである。①イエスの死・埋葬・復活（イコリント一五章によれば使徒的福音伝承の最重要事項）に関し、女弟子たちが果たした「目撃者証言」としての重要性を論証している。②一世紀パレスチナに生きた「ユダヤ人イエス」を再構成するにあたっての福音書の歴史資料としての信頼性を支持する考古学的・地理情勢的資料を（小さな入門書という制約の中で）駆使している。

「日本の読者へ」と「まえがき」では、今私たちがイエスを少しでも確かに知るためのいくつかの重要な提案がなされている。例えば、これまで用いられて来た複雑な方法論を用いたアプローチを取らないこと。その代わりに四福音書は、イエスを直に知り彼から大きな影響を受けた人物たち、すなわち「目撃者」たちの証言に基づいた確かな伝承だとするアプローチを取ることに。また四福音書を「イエスの歴史」のそれぞれに異なる解釈として積極的に用いること。イエスをその歴史的文脈に置くために「歴史家が入手できる最良の資料」を用いることなど。このようなアプローチを通して私たちは二千年前に生きたナザレのイエスの「複雑で生き生きとした人物像」に近づけるのではないだろうか、と提案している。

本書のイエス描写そのものについて少し触れたい。イエスの言行録は、これまでの入門書では「奇跡物語」「たとえ話」「山上の垂訓」などの項目にまとめられることが多かったが、本書では「神の王国」の宣教という視点の下に納められている。つまり、ナザレのイエスの「言葉と行い」を導いた「神の王国」

総合的に大変優れたイエス入門書と言えるだろう。ボウカム教授のような優れた歴史家による大胆な太い線と時折見せる詳細な線による「イエスの素描」は、しっかりと腰を据えて読むに値し、それだけ読者の集中力も要請される。しかし見返りは大きい。注意して読めば専門書でしかお目にかかれないような情報・洞察がちりばめられており、読みながら、まるで宝物探しをしている感じがするだろう。

本書は適当に書かれたイエス入門ではない。世界一級の聖書学者、原始キリスト教史学者がイエスについて投げ込んだ直球である。しっかりと受け取ってほしい。
最後に、ボウカム教授自身の大変よく整備されたウェブサイト (<http://richardbauckham.co.uk/>) もぜひ参照していただければと思う。

(こじま・たかし) 東鴨聖景キリスト教会牧師
(四六変判・二二〇頁・定価一九九五円(税込)・新教出版社)

日本を代表する旧約学者の
集大成、刊行開始!

並木浩一著作集1 全3巻

ヨブ記の全体像



旧約聖書は今、私に何を語るのか。この問いに生涯をかけてきた旧約学者の著作集。本巻はヨブ記論をまとめ、全体像を意識し、丁寧に読み解く。ヨブに神より与えられた新しい視点とは。
A5判・338頁・4200円

2 批評としての旧約学
2013年12月中旬刊行予定
3 旧約聖書の水脈
2014年春刊行予定

みんなで礼拝 アイデア集

「こどもさんびか改訂版」を用いて
礼拝アイデア集プロジェクト 編



子どもと共に心を合わせて礼拝をささげるためのアイデア集。年間の礼拝案や礼拝要素の解説など大変役立つ。
B5判 80頁 1680円

信仰生活の手引き 礼拝

第4回 記本

なぜキリスト者は主日に礼拝に集うのか。礼拝の意味を明快に描き出す。 四六判・160頁・1,365円

日本キリスト教団出版局

〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18
☎03-3204-0422 ☎03-3204-0457
E-mail eigyoubp@bp.ucci.or.jp (価格税込)

<http://bp-uccj.jp>

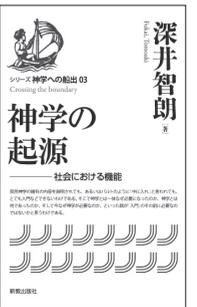
波瀾万丈！ 神学の生涯

深井智朗著

神学の起源

社会における機能

《シリーズ神学への船出3》



田上雅徳

深井智朗氏の新著『神学の起源』を、大河ドラマとして読むことを提案したい。ドラマの主人公、それはキリスト教神学である。つまり「神学の社会的機能」を歴史的に跡づける本書は、神学という個性豊かな主人公が古代地中海世界に誕生し、西ヨーロッパやアメリカといった環境と出会い、それらを作りかえたり、それらに作りかえられたりしながら強かに生きてゆく、そういうロマンとしても読めるのである。

ドラマのあらすじはこうだ。

主人公は「イエスはこの世の終わりを教えたのに、この世の終わりはまだ来ていない」という現実についての説明」として生まれるのだが、この主人公は、産婆役でもあり仇役でもある古代ローマ帝国と向き合う中で、これとの共存を試みる。最初の体質改善を通じて、である。すなわち神学は神の国を、当時「この世」とほとんど同義であったローマ帝国の廃棄後に出現するものとしてではなく、かの帝国と共存可能な別の空間を構成するものとして消化し直すことで、問題の処理を図るのである。

中世に入ると、アルプス以北の西ヨーロッパ世界という舞台かつ相手役を得た主人公は、おもに時間と死を支配することで、存在感を増すようになる。暦の制定や墓地の管理が、その際の方策である。また、主人公はここで哲学と科学というライバルたちと遭遇することになるが、最後には両者の一段上に立つ地位を得る。当時の哲学からすれば受け入れ不可能な科学上の現象であっても、それを主人公は独自の説明によって「救う」ことができたからである。こうして、若々しい力に満ちた神学の青春期が描かれることになる。

そんな主人公の生き方に修正を迫ったのが宗教改革だった。信仰の分裂という新しい事態に直面した神学はこのときから、普遍的な世界の説明という使命を後退させ、代わりに、並立する各信仰を擁護する役回りを担うようになる。また、近現代期で見落とせないのが、主人公の迷走であろう。この時代、神学は「教会や伝統や他人がどう言おうと、自分の心で感じる神が全てなのである」と言い切るまでに至ったが、こういう時ほど危険は忍び寄っている。事実、旧来のしほりを脱したと自惚れ

かけた主人公は、かえって、人々のニーズやナシヨナリズムに振り回される羽目に陥るのである。そして、ドラマは現在も続いている。さて、このように内容を要約すると、なんだそれは神学史じゃないのか、と思われるかもしれない。しかし本書を読んだ多くの方は、これを通常の神学史研究書として位置づけることに、きっと違和感を覚えるだろう。なぜなら本書の大きな魅力は、それ自体は無色透明な史的実事が著者によって、あるいは興味深いエピソードに変換され、あるいは巧みなたとえで説明される、その記述スタイルにあるからである。頁を繰るうちに読者はいつの間にか、豊かなイマジネーションを呼び覚ます神学史の公園を逍遙している自分に気づくはずである。

最後に、本書が単なるトリビアな歴史書ではなく、今日の教界に対する真摯な問題意識の産物でもある点に触れておこう。

たとえば本書では何回か「神学は教会の学である」という言葉が取り上げられる。ところで伝道の最前線で働く人びとがこ

の言葉を口にする時、往々にしてそこには、神学は教会員の敬虔さをどれだけ培えるか否かで評価すべきだ、というニュアンスが付きまといていないだろうか。これに対し著者は、そうしたニュアンスの正当性を認めた上で、「歴史の中ではそのような見方だけ神学が取り扱われてきたのではない」ことを指摘する。このとき私たちは、次のことを考えるよう示唆されていないだろうか。すなわち「(狭義の)教会の学」として神学を受けとめているとき、著者が魅力的に描いたかの主人公に対して私たちは、いくつかの役割を期待しなくなつて久しいのではないか。またそのことはそもそも妥当なのか。

良き歴史書として良きドラマがそうであるように、本書もまたアクチュアルな反省を私たちに促してやまない。

(四六判・二二六頁・定価一八九〇円(税込)・新教出版社)
 (たのうえ・まさなる)日本キリスト改革派千城台教会会員、慶応義塾大学法學部教授)



マタイによる福音書

1章から7章の説教

林 勵三
Reizo Hayashi



マタイが伝える福音を
しっかりと
聴きとりたい——
インマヌエルの主イエスを証言し
山上の説教が語るメッセージを
説き明かす珠玉の小説教。

四六判

定価 1,890 [本体 1,800 + 税] 円
ISBN978-4-86325-058-1

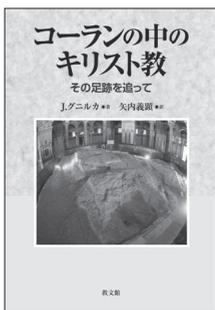


株式会社 一麦出版社
札幌市南区北ノ沢3丁目4-10
TEL (011) 578-5888
<http://www.ichibaku.co.jp>
携帯 mobile.ichibaku.co.jp

ユダヤ教・キリスト教・イスラム教の歴史的接点を探る

J・グニルカ著
矢内義顕訳

コーランの中のキリスト教 その足跡を追って



戸田 聡

著名な新約学者グニルカ氏（一九二八年生）は、ミュンヘン大学カトリック神学部（新約釈義・聖書解学担当）を一九九七年に退職して名誉教授となった後も健筆を揮っている。その氏が退職後、特に盛んに論じているテーマの一つがキリスト教とイスラム教の比較であり、本書を含む三作が既に公刊された。聖書とコーランを全般的に比較した前著『聖書とコーラン』（二〇〇四年、邦訳は教文館刊）に続いて、第二作たる本書『ナザレ人（派）とコーラン』（二〇〇七年）では、コーランに見られるキリスト教がいかなるものだったかが探求されている。そのような本書の邦訳題として、『コーランの中のキリスト教』は決して不適切でないと言えよう。第三作（二〇一一年刊）は評者未見だが、イエスとムハンマドが比較対照の中で論じられている由。いずれも全く学問的な著作と評しうることが、それら著作の背景に、現代の宗教間対立への平和的貢献を願う著者の祈りがあることもまた間違いないところだろう。

連作としての本書の性格に鑑み、まず前著を見ておく（なお、前著邦訳に対しては本誌二〇一二年七月号に板垣雄三氏による

書評がある）。前著では聖書とコーランが、特にその神学的内容に即して比較され、結論として八つの「結びつけるもの」（両宗教とも啓示宗教・一神教・アブラハム宗教であること、神による世界創造を認めること、最後の審判を期すること、十戒の受容、等）と六つの「引き離すもの」（イエス・キリストの位置づけ、救済思想、終末期待、十戒の掘り下げ方、などの違い）が指摘された。本論の中で詳論された神観の違い（同じ一神教でも、神観の点でキリスト教とイスラム教は相当異なる、という議論）がまとめの中で言及されなかつたのはやや奇異だったが、概して前著は堅実な比較を展開していたと言える。それに比して本書の議論は、仮説的性格が相当強いことが否めない。つまり本書は、コーランの中でキリスト教を指す呼称として通常使われる「ナザレ派」という表現を出発点とし、同じ表現の新約聖書などでの用法を根拠として（ヘブライオイ対ヘレニスタイという使徒言行録中の有名な記述も参照されている）、この表現はユダヤ人キリスト教の一派を意味すると論定し、それこそが「コーランの中のキリスト教」だ、と論じてい

るのだが、相当強引な議論だと言わざるをえない。なぜなら、コーランの「ナザレ派」という表現がキリスト教の特殊な一派を指すという形跡が、全く窺えないからである。コーランはキリスト教の中の諸派の存在を知っており、しかもそれらをいっしょくたに否定している（本書一三七頁を参照）、ということもまた、コーランがキリスト教を（たぶん耳学問に基づいて）キリスト教一般というレベルで把握していたことを示唆する。さらに、コーランの背景を成す当時のキリスト教を論じる際の基本的文献である、Trimingham (1979)・Havenith (1988)及びIran Shahidの一連の著作を本書は全く参照していない。著者の議論は成功していないように思われる。ただ、だからと言って、ユダヤ人キリスト教に関する本書の議論を無意味だと思わず必要はない。ユダヤ人キリスト教（いわゆる「キリスト教のギリシア化」を免れた潮流）をどう理解するべきかは古代キリスト教史上の難問の一つであり、それに関する新約学の碩

学の議論だと見れば、それ自体は大いに興味深いのである。全体として、文書資料に基づいて地に足のついた比較を行う著者の姿勢は、評者には好ましく思えた（イスラムのロジックが論じられていないという、上記書評での板垣氏の批判は高踏的で、やや的外れの感がある）。本書の訳文は生硬で、読みやすいとは言いがたいが、著者の思索をたどるにはむしろ好適かもしれない。上述の第三作は翻訳の予定があるのだろうか。内容から見て、疑いなく著者の専門性がより発揮されているだろうから、連作の続きの刊行を期待したいところである。

* *Byzantium and the Arabs* 題された複数の著書。また、グニルカの本書と同時に出版した T. Hamhalter: *Christliche Araber vor dem Islam*, Leuven: Peeters, 2007 を今や参照されるべきだろう。

（とだ・さとし 北海道大学大学院文学研究科准教授）
（四六判・二二八頁・定価三三〇円（税込）・教文館）

聖公会出版

— 近 刊 案 内 —

イギリス人の宗教行動

ウェールズにおける国教会制度廃止運動
著●木下智雄 (A5判・上製・350頁)

十六世紀後半の宗教改革以降、国教会制度は近代英国の形成に重要な役割を果たしてきた。しかし、近代に入ってからこの制度は非国教徒による宗教的平等実現要求により、ウェールズでは廃止された。本書では、ウェールズにおける国教会制度の発生からその実現まで多くの資料から跡づける。英国の宗教史の中で特筆すべきこの運動に関する本邦初の研究書。

二つの日本

真珠湾までの二〇年間
著●オードリー・サンズベリー・トークス
訳●松平信久・北條鎮雄 (四六判・並製・307頁)

第二次世界大戦前の二〇年間を日本で過ごしたある英国宣教師一家の記録。彼は、戦前の日本のどかな田舎の暮らした様子から、その後の重国主義の台頭、満州国建国など、世界と日本の政情などを詳細な日記に残した。本書によって、戦前戦中の日本人が見なかつた、真実の日本の姿を見ることが出来る。

ほかに神があつたならば

（日本版インタープリティオン 第81号）
総合監修●月本昭男・大貫隆・西原廉太
（A5判・2100頁）

北米で60年以上の歴史をもつ INTERPRETATION 誌の日本語訳の最新刊がいよいよ刊行。唯一の神をテーマに現代の「偶像」と向き合う、意欲的論文を掲載。

只今定期購読申込受付中!

〒162-0814 東京都新宿区新小川町9-1
☎03(3235)5681 FAX 03(3235)5682
http://seikokai-publishing.jimdo.com
naskk-bookshop@company.email.ne.jp

カトリック教会の過去と現在

L・S・カニンガム著
青木孝子監訳

カトリック入門



岩島忠彦

「カトリック」とは何か? ご存じのように、もともと教会の特徴を表現する言葉で、古くは二世紀初めのアンティオキアのイグナティオスも教会をカトリックと呼んでいる。「普遍的」に相当するギリシア語であり、キリスト教会はすべての人にとって決定的に大切な存在であると言っているようなものである。しかし一六世紀の宗教改革以来、プロテスタントやアングリカン教会に対する教会の呼称として用いられるようになった。もともと教会はカトリックであった、しかし今は半数ほどのクリスチャンの教会を指す呼び名となった。本書は後者の意味でのカトリック入門である。

著者L・S・カニンガムは米国で教鞭を取るカトリック信徒であり、カトリック教会を言わば「内側から」描いている。とは言え、十分に公正であり説得力を持つ。それは著者のカトリック教会のとらえ方が、多角的であり、かつ歴史的存在であるからである。そこではカトリック教会を、その建築を始め、教理、信心、礼拝とくにミサ、諸秘跡、制度とくに教皇制度、霊性とくに修道会、カトリック倫理などの面から重層的に描いていく

からである。その際、それぞれの章は歴史的に回顧され今日に至る道筋が確認される。アウグスティヌスはもとよりキプリアヌス、護教論者、さらにはしばしば新約聖書にまで遡る。終わりの方で著者も言う。「本書に一貫して流れる論旨の一つは、カトリシズムの過去と現在の間にある緊張関係を論ずることである」(三二六頁)と。ということになると、これはカトリック教会についての書物であると同時に、古代以来の意味でのカトリックについての書でもあることになる。一六世紀までは、キリスト教会がすべて「カトリック」の範疇に属していたのである。

歴史的推移を確認しながら、著者が現代のカトリック教会の立ち位置を確認することを目指していることは明白である。カトリック教会は幾度も脱皮し、時々に対応した形態を取ってきた。諸伝承を尊重しながら、新たな局面・新たな諸問題に対処しようとする。こうした努力の最後のものが第二バチカン公會議(一九六二―六五年)である。著者はこの公會議で成立した一六の文書にしばしば言及する。また公會議の宿題の一つであ

った「カトリック教会のカテキズム」(一九九二、九七年)を引用して、現時点でのカトリックの公式見解を確認しようとしている。公會議はこれまでのカトリック教会の姿勢を大きく改めた。まずは教会が自己の救いのためにあるという閉鎖的考えを改め、教会が全世界・全人類のために貢献する使命を持っているとして、自己の存在意義を「外」との関係で規定し直した。それと関連して、プロテスタント教会との関係を積極的に見直し、さらに他宗教の存在意義をも前向きに評価し直した。この公會議終了から五〇年近くが過ぎていく。

著者は事実上の最終章、第一章で、この公會議が決意した方向転換がどの程度実現しているかをこれまた、個々の領域にわたって検証している。難民、原理主義、西欧の世俗化、世界規模のテロリズム。教会内においても教皇庁の改革、信徒の奉仕職、エキユメニズムなど、ある程度の進展は見せたもののまだまだ理想にはほど遠い。

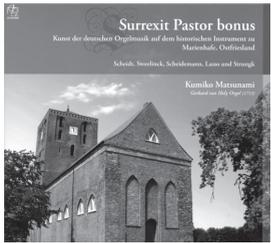
本書はカトリック教会とは何かについて、理念よりも実際の姿をリアルに分かりやすく提示している。四〇〇ページを越す本文は、きつちりとその全体像を描き出している。ただしやはり「カトリック入門」である。それぞれの分野を四〇頁前後でまとめているため、より突っ込んだ考察が欲しいと思う点多々ある。それは教理においても倫理においても感じさせられる。著者はその限界に気づいて、多くの文献を各章の終わりに挙げてさらなる研究を促している。

かつてR・マクブライエンの名著「カトリシズム」は総合的なカトリック入門書であった。今日、日本語で最新の「カトリック入門」を読むことができることは喜ばしい。

(いわしま・ただひこ 上智大学神学部教授)

【好評発売中】
よい羊飼いはよみがえられた

歴史的楽器で聴く
ドイツオルガン音楽



演奏：松波久美子

日本福音ルーテル宮崎教会音楽監督及びオルガニスト、A.シュニットガー協会日本事務局長。

CD録音時間64分34秒 定価 2,940円

建造三〇〇年の節目を迎えた北ドイツの歴史的楽器(ニードザクセン州マリエンハーフェの福音ルター派聖マリエン教会にホーリーが一七二三年建造で、ドイツオルガン芸術の粋ともいべき北ドイツ楽派の至芸を、その源流からじっくりとラツツ、スヴェーリク、シャイト、シャイデマン、シュトゥールンクの下に学んだ名手・松波久美子が、しなやかに解きほぐしてゆく、確かな伝統と、巨匠たちの比類ない才覚、名器の積み重ねてきた年月が、味わい深い美音となり、教会堂の空気を静かにふるわせ、私たちの耳に、心に、届けられるひととき――。

●演奏会等の詳しいお問い合わせ先
〒880-0031 宮崎市船塚3-40
JELC宮崎内 シュニットガー協会日本事務局
TEL 0985-71-1812 / FAX 0985-24-5438

発売元 LITHON [リトン]
101-0061 千代田区三崎町2-9-5-402
FAX 03-3238-7638

今日における最良の入門書
W・J・エイブラハム著
藤本 満訳

はじめてのウエスレー



岩本助成

第十八世紀のイギリス宣教師は「死を決意した伝道者」の「可能な事業」といわれた。イングランド国教会司祭ジョン・ウエスレーは、母国やウェールズやスコットランドでの宣教のほか、四十年間に二十一回も荒海を越えてイギリスに渡り、各地を巡って聖書を説き続けた。その間の牧会書簡の多さに驚かされる。本書はそのイギリス・メソジスト出身の神学者W・J・エイブラハム博士によって書かれた。ウエスレー自身に多くを語らせて虚像からの脱却を試み、研究に新しい視点をもたらすウエスレー神学の入門書である。

著者はベルファストのクイーンズ大学、米国のアズベリー神学校で学び、オックスフォード大学（リージェンツ・パーク・コレッジ）で学位を得た。現在、米国合同メソジスト教会聖職者であり、南メソジスト大学パーキンス神学校の名譽ある「アルバート・アウトラー教授職」にある。最近『オールダースゲイトとアテネ』や『オックスフォード組織神学ハンドブック』の「神論」を書くなど、学界の注目を集める教義学者、宗教哲学者である。研究領域は神論や聖書正典論だが、教会の

霊的刷新や宣教問題にも関心を持つ。

本書はウエスレー神学が教会の伝統的本流に立つと述べ、時代が投げかける神学的な課題に答え、「応答する恵み」を統合的に強調するその独自性に迫ろうとする。入門書には珍しくウエスレーの神学的貢献面と共に問題点を率直に記している。賛否両論があるが、初学者にも研究者にも発見と啓発と洞察を与える最良の入門書と言えよう。

エイブラハム博士は「時の流れ」を読みつつ第十八世紀の歴史的背景を分析する。「五つの神学的な分水嶺」を論じながらジョン・ウエスレーの生涯を点描するが、一読して原資料を綿密に検討していることが分かる。ウエスレー神学の核心を創造、墮罪、先行の恵み、特に、救い（義認、新生、聖化、キリスト者の完全、確証）へと論じ進み、教会論、恵みの手段、キリスト者の倫理を経て、摂理と予定論を取り上げる。その予定論に「ウエスレー神学の深み」と「神学全体への影響」を見て独自な予定論を跡付けている。

「恵みによって、すべての人は、その罪が洗いきよめられ、

神の愛を生きるようになることができる。それがウエスレーの神学的確信であった」（五三頁）。「すべての人」と言うが、著者は当時の一貴婦人がウエスレーの活動を上流階層への反逆と捉えた事実を彼女の手紙で例証する（二三〇頁）。社会や教会から締め出されたアウトサイダーへの彼の宣教は、確かに危険視された。明日を生きる活力を失いがちな一般民衆層に、救いの福音の力動性を体験させたのがウエスレーの生涯と神学であった。アウトラーの古典的表現では、「民衆神学者」（『ジョン・ウエスレー』プロテスタント思想叢書、オックスフォード

自身の存在をかけて実行されていく、ということ」（二二二頁）などの叙述が味わい深い。

訳者に求められる資質は語学力、時代感覚と専門的な知識であるが、これら諸条件を満たす訳者を得て本書は真価を発揮している（五六頁の「新しい出発」、八〇頁の「概念発問」、一三六頁の「古典的」ほか、「遍在」の誤植が惜しまれる）。原書と比べつつ読んだが、「これこそ翻訳！」と楽しく読み終えた。加えられた邦語参考文献表も明日の学びを助ける。

（いわもと・すけなり）日本フリーメソジスト西田辺伝道所教師

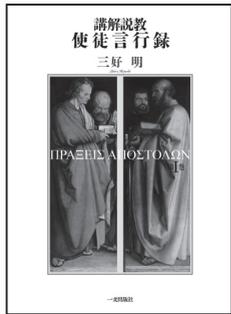
前日本ウエスレー・メソジスト学会会長
（四六判・二四四頁・定価一九九五円〔税込〕・教文館）

大学出版局、一一九頁）にして初めて可能な神学活動であった。「ウエスレーは、私たちが神を信じるとき、私たちは神の愛に魅了され満たされ、私たちの内側に大変革が起こると確信していた」（一一二頁）。ウエスレーの神学的な「確信とは、主権者なる神は、ご自身が抱いておられる目的を、人間がどのように立ち居振る舞おうと、歴史と永遠の双方の領域において、ご



講解説教 使徒言行録

三好 明
Akira Miyoshi



全三巻

聖書的・教理的・伝道的説教

第Ⅰ巻は、パウロの回心まで。
第Ⅱ巻は、ペトロの異邦人伝道からパウロの第二回伝道旅行の終わりまで。
第Ⅲ巻は、パウロの第三回伝道旅行からローマでの伝道まで。

四六判・上製
定価＊Ⅰ3,780円/Ⅱ3,990円/Ⅲ3,570円



株式会社 一麦出版社
札幌市南区北ノ沢3丁目4-10
TEL (011) 578-5888
<http://www.ichibaku.co.jp>
携帯 mobile.ichibaku.co.jp

我はまことの葡萄の木



森田 進

これは、父方、母方ともに三代に及ぶ暮らしの現場で、キリスト教信仰がどう息づいてきたのかを孫娘が綴った短編集である。詩人・仏文学者である著者が、稀にみる受信装置を駆使して描き出した文学作品である。

父方は、稗田阿礼を生んだ環濠村の農家であり、法隆寺の檀家総代である。母方は、大原総一郎と共に倉敷教会を創立した一人である。

父は『聖書と植物』を出した植物学者であり、キリスト教主義教育の指導者であった。

本書は、神学書ではない。伝道者の聖書注釈書でも説教集でもない。

私ども日本キリスト教詩人会の機関誌『嶺』に二〇年に亘って掲載し続けた作品である。あえて言えば散文詩を着込んだ信仰告白である。

二八編に及ぶ短編を、著者は「この集は故郷としての稗田の環濠集落や、私の記憶にからみついて繁茂する植物たちのエピソードにキリスト教徒の家族の歴史が重なるという、いくつつか

のテーマが緋い合わされている」と書く。

冒頭の「小さな教会のはじまり」には、父松村義敏が、終戦の年の春から一九五一年まで東大理学部付属の日光植物園に研究主任として家族ぐるみで暮らしながら、裏の菜園の手入れの様子まで描かれる。父の豪放、開放的楽天性に牽かれて、全国の研究者が訪れてくる。あるいは復員した獣医、古河電工の社員など多様な人たちが集まって聖書研究会が開かれる。宣教師たちも戻って来て、ついに小さな教会が建つ。

植物学的、聖書の契機から葡萄に対する激しい思い入れを持ち続けて、故郷にも、引越す先々でも栽培する父に影響された著者の葡萄に関する数章は、本書の題名に直結するのであるが、驚くほどの楽しい知識と経験で一杯である。論理的世界の達人のだが、聖句を実感するとはどういうことなのかを伝えてくる部分は、挑戦的ですからある。

オルガンと讚美歌が契機となった西洋音楽への開眼も刺激的だ。歌詞と音の関係（色彩、和音、リズムなど）、種子の「お芽出度う」の神秘、花の芳香、果樹への興味、キリスト教の愛

の概念など、著者は、大学入学、恋愛、結婚、子育て、学問の隅々まで植物との交流から触発されている。また近江兄弟社の「ヴォーリズさんのおばちゃん」の部分、および「おとさんとわかさん」には、劇作家・高堂要への追悼がしみじみと匂っている。

本書全体に満ち溢れている著者の教養の豊かさは、父母二つの家系と自然がもたらしたものである。自分を取り巻く周囲をじっと見詰めている著者がそこからきわめて鋭い受信装置を身に付けたことが分かる。それは、父から受け継いだユーモアだけでなく、母から受け継いだ鋭い批評精神であり、植物から学んだ、成長する神秘的な生命力である。

本書は家族の歴史であり、キリスト教との同伴史でもあるが、あくまでも詩人・川田靖子の作品であることは最初に指摘した。種子への興味は、例えば、「種子にはかくべつの愛着がある。象徴的な意味があるので好きなのか、種そのものが好きなのかよくわからない」（二六頁）には、論理性よりもっと肉体的な生理的な実感に近いものを感じる。あるいは「空の鳥を見よ」を挙げて、「人間に自意識や想像力があるかぎり、鳥の

ように清らかな生活は望めないことなのだろうか」（三三頁）。

どきとする指摘もある。「音楽というジャンルそのものにも融通無碍の本性があつて、軍歌にでも労働者の歌にもつけ替え可能というのが胡散くさい」（二六頁）。「庭を見ているとき私は時間を見ていることに気づく」（一〇一頁）。至る所にびりつとした批評精神が息づいている。

最終部分の「百合のごとく」は、プロテスタントの私には衝撃的である。川田靖子さんはカトリックへ転身したのである。青木神父の「あなたが、どちらでもいいけれどカトリックに來たいと言うのなら、あなたの魂なんか要りませんよ。（以下略）」（一七五頁）。

人にはそれぞれ、こういう風にしか生きられなかった、という生き方がある。川田さんとの友情に変わりはない。それだけのことだ。

散文詩を着込んだ信仰告白の秀作としてお勧めする。

（もりた・すすむ 詩人、日本基督教団十師教会伝道師）
（四六判・二二八頁・定価一五七五円〔税込〕・教文館）

私たちに突きつけられた問題提起
オードリー・サンスベリー・トークス著
松平信久、北條鎮雄訳

二つの日本 真珠湾までの一〇年間



渡辺憲司

日本という国への検証が急務である。この国は、内なる評価に終始してきた。独りよがりの国であった。この国がもつとも大切にしてきたものが自己満足ではなかったのか。そんな思いがしてならない。

そんな時にこの本に出会った。

真珠湾への奇襲によって対米国との戦争は始まった。一九四一年十二月である。その十年前、一九三二年四月、サンスベリー夫妻がイギリスから宣教師として来日した。結婚一年後であった。そして日本で家族が形成された。三四年には長男クリストファーが誕生し、三六年には、サンスベリー家の長女として、本書の著者、オードリー・サンスベリー・トークスが誕生した。また三七年には、妹のヘレンが生まれている。

オードリーの父ケネス・サンスベリーは、聖公会の司祭、沼津で二年間過ごした後、東京、池袋（現立教学院敷地内）にあった聖公会神学院教授となり、英国大使館のチャプレンも務めた人物である。

著者オードリーはもとより、若きサンスベリー一家にとつて

も、日本は、この一家を育んだ故郷であった。

本書は、英国人による望郷日本誌である。

この家族を取り囲んだ時代の状況は、厳しく悲しい。ケネスの来日直前三年には、所謂、満州事変が勃発し、来日の年には、偽満州国が成立し、翌年日本は国際連盟から脱退した。三九年には、第二次世界大戦が始まり、日本は国際社会から孤立していったのである。

本書は、同僚の宣教師達の経験談、手紙、日記などから当時の日本の状況を浮上させる。それは、戦時下という井戸の中にいて、外の見えなかった日本人への鋭い警告と愛惜である。

著者は二つの日本という。

「私たちには二つの日本があった。家では両親が、好意と善意に満ちた日本で過ごした数年間を思い出していた。日本時代の友人たち——その内の一人がヘーズレット主教であった——が訪ねてきたが、その話は、彼らが知り、そして愛した日本の事であった。（中略）しかし、我が家の外では、軍国主義日本、特に戦時捕虜を扱う日本人の野蛮さが話題であった」。

彼女及び家族は、日本人に対する善意と反感の狭間にあった。それは、英国人及び外国人に限られた状況ではない。戦時中及び戦後、キリスト教が、殊に本書では聖公会が抱えた問題である。そして、その着眼点の帰結が、日本人自身、つまり我々に向けられている課題であることを意識しなければなるまい。

本書の存在理由が、幕末及び明治初期に訪れた外国人の紀行文などと一線を画しているのはこの点である。異国人の好奇の視線を読みとめることはふさわしくない。好奇ではない。ここにあるのは私たちに突きつけられた問題提起なのである。

この本は、「節度ある文明国を破壊するような軍国主義への告発」（原著序文「ロナルド・ブライス」）である。

一九五九年、彼女の両親が、日本聖公会の宣教百年式典に参加のため来日した。その時の八代首座主教の挨拶が引用されている。

「戦争末期に、ほとんど全ての日本人が国家の危機に気づき、あたかも捕縛され鎖で繋がれたかのように、毎日を重い引きずる足で働いていたときに、詩人堀口大学は、わずか三行の簡潔な詩を書きました。『感謝せよ。今日、私にまだ命のあることを』と」。

この引用の意味する所は、戦争責任そして惨禍から立ち上がる命の重みである。

その命の重みを共有した多くの方の名前が、ここには上げられている。聖公会関係、立教大学関係などには、実に懐かしい名前が散見する。立教のみではない、彼女自身また兄も、友人も通っていた自由学園のこと、香蘭女学校のことなど、記憶の底に刻まれた名前が本書によってはつきりと浮上するに違いない。

巻末には、訳者による当時のアルバム、聖公会関係の資料が所収されている。

訳者はあとがきに言う。「二つの顔のうちの一つ、偏狭と抑圧と他者への蹂躪などに満ちた裏の顔を復活させる事は決してあつてはならない。それとは逆の、寛容と抑制を持った自由と協調の精神に支えられたさわやかな表情を持ち続けたものである」と。

まことに同感である。本書のさわやかな表情を著者・訳者そして読者と共有したいものだ。

（わたなべ・けんじ）立教大学名誉教授、立教新座中学・高校校長
（四六判・四三三頁・定価三六七五円（税込）・聖公会出版）

人の生き方や価値観を根本から問い直す言葉の力
河合裕志著

イエスの言葉100選

イエスの言葉
100選 河合裕志



朴憲郁

『イエスの言葉100選』は、著者の河合裕志氏が現在牧師として仕える日本基督教団新横浜教会で主日礼拝ごとに行った説教の中から、一〇代から大人の世代までの幅広い一般読者向けに整えて要約したものの収録である。

イエスの言葉は、マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネ福音書の聖書箇所から九八が選ばれ、最後にイエスの語録引用である使徒言行録二〇・三五（「受けるよりは与える方が幸いである」と）と第一コリント書一一・二四（最後の晩餐におけるイエスの言葉）が加えられている。四福音書におけるイエスの言葉集に、なぜ最後の二つだけが福音書以外の文書の中から加えられたのか、その理由は明らかにされない。

『100選』は、イエスによる神の国への招きの言葉、信仰の生の幸い、正しい倫理的生き方への促しなどであるが、著者は、誰でも理解できる平易かつ明解なワンポイント説教として説く。聖書箇所の解釈に関しては、緒論も含めて聖書神学の基本的な知識と教理的伝統が踏まえられている。

平易かつ明解なメッセージとなっている証拠の一例として、

イエスの言葉・語録そのものが、聴衆・読者に「生きる意味を提供する」（二二二頁）格言的、預言者のワンポイントメッセージとなっている。

若者を初め一般庶民の思考と生活感覚に寄り添って対話し、説得していく論法、そしてイエスの言葉の確な把握は、過去四五年来に亘る諸教会での牧会と説教で著者が培ったものであることを読者に感じさせる。福音書のイエスの言葉が、礼拝説教のメッセージとして語られるだけでなく、生活を具体的に導く教訓・指針となり、ある場合にはそれとは逆に、人の生き方や価値観を変え、現代文明のあり方をも根本から問い直す言葉として作用することを、読者は改めて学ぶ。

幅広い一般読者向けの書物とは言え、評者が最初に思い浮かべるのは、圧倒的にノンクリスチャン生徒の多いキリスト教学校の聖書科授業や礼拝説教で、本書が有効に用いられるのではないかとということである。事実、そのように積極的な反応があると伺っている。キリスト教学校でささげられる礼拝の説教がしばしば道徳主義や人道主義に陥るさらいがあると言われるが、

マタイ福音書から三一のイエスの言葉を簡潔に展開している。律法学者やファリサイ派の人々に対決しつつ律法を徹底させ、あるいは常識的な思考をひっくり返すイエスの過激な言葉と振る舞いは、今の読者たちをも当惑させる（五章以下の山上の説教の数々）。人はパンだけで生きるのではない、敵愛、天に富を積む、狭い門から入る、七の七〇倍の赦し、白く塗った墓、などがそれである。それらのイエスの言葉を丁寧に扱えば、多くの論争的解釈を要するであろうが、著者は自ら達した一つの帰結を、読者たちの日常の思考と言語を用いて、わずかに数行で巧みに解説して、メッセージへと繋げている。

説教学的に捉えると、この種のワンポイントメッセージはどのように位置づけられるであろうか。よく構想された三〇分以上の説教、物語風のメッセージなど、聴衆の場に応じた説教テキストの展開の仕方があり、持ち味があるに違いない。だが、一瞬、理解困難と思われるイエスの言葉の核心的意味を捉えて、聴衆や友人に向かって一挙に語って悟らせることは、決して容易とは言えないが、必要な場合が少なくない。考えてみれば、

それとは対照的に、直ちに信仰的決断を迫る伝道説教となることも好ましくない。むしろ非キリスト教的背景をもつ多くの学習者たちへの教育的配慮がなされ、神関係における新たな人生観、世界観、価値観を自由に思い巡らせて、自らの存在と意味を問わせ、信仰へといざなうことが求められる。本書は、それらのいくつもの要望に的確に答える優れた書物であろう。

「おわりに」で著者は、金持ちにはなれないが食いつぶれらることのない「牧師職」がどんなに幸せかを読者に伝える。なぜなら、それは代々の人々を引きつけて生きる意味と力を提供した聖書を、誰よりも多く読んで親しむことができ、さらに、そこから得たものを「説教」として語る大切な務めを負うからであると言う（二二二頁）。今、日本でひそかにベストセラーであり続ける「聖書」への導き手として、本書が読まれることを、著者の親しき知人として願う。

（ばく・ほんうく＝東京神学大学教授、日本基督教団千歳船橋教会牧師）
（四六判・二三四頁・定価一五七五円〔税込〕・日本キリスト教団出版局）

今日も注目すべきキリスト論
 シュライエルマッハー著
 松井 睦訳

第一分冊「キリスト論」
信仰論 下巻



倉松 功

本書はシュライエルマッハーの著『信仰論』下巻の冒頭を占めるキリスト論の一部としても戦後の初訳である。なお引き続いて本邦初訳の完成を心から願っている。

本書の概念用語には、既に『信仰論』上巻でも展開された自意識とか神意識などが頻繁に使用されている。そのゆえに、かつて神学的心理主義とか意識神学と、今日ではパネンベルクによって敬虔主義的信仰の主観主義と批判された。しかしそれらの概念は啓蒙主義、批判哲学、諸科学の発達を前にしたシュライエルマッハーの『宗教論』以来の弁証論でもあった。以下本書の主要部を部分的に紹介する。()内は評者の注である。

第一部 キリスト
 第一教説 キリストの人格

§93 歴史的人間としての救贖者は(創造の)原型であったに相違ない。§94 従って救贖者は人間の本性との同一性によってすべての人間と同じなのであるが(キリストの人性)、彼の中の神の真正の神意識(神性)によってすべての人間から区別される。

そこでシュライエルマッハーは、両性の関係について、救贖者においては神は人となったという表現は(完全に)キリストにあてはまる、なぜならいつでもどこでも彼の中の人間性は神性を起源とするからである、と附言している。右の問題はさまざまな論争の結果、教会の信条となった。それを前提として、シュライエルマッハーは、キリスト論の第一の教理を提示している。

§96 第一の定理、イエス・キリストにおいて神性と人性は一人格において結合された。

この教理を提示するにあたってシュライエルマッハーは『信仰論』の標題通り二つの世界信条と五つの福音主義信条によって神人両性の教理を詳細に検討している。そして本項キリスト論の中心問題に向かっている。それが次の第二の教理としてとりあげられ、神性と人性の結合の状態や処女降誕、属性の交流、属性の共有の問題が論じられているのである。

§97 第二の定理 神性と人性の結合においては神性のみが活動するか、あるいはそれを分与するのであった。そして人性

のみが苦しむかあるいは除外されていたのである。しかし、他方面性の結合においては、全ての働きは両性の共同の働きであった。この教理に従って、シュライエルマッハーは、キリストの全ての働きが神性と人性両性が共に一つの中で働くことを例示するのである。この観点から処女降誕の仮説は不必要となる。全てはより高度な働きの介入に基づいているからである。それは深い罪の全ての根拠から離れた方法による、父と母の影響を変えるような創造的の働きの働きである。それゆえ、マリアが処女のままであったという(カトリックの)主張は完全に根拠がないと附言している。

次は人間の歩みにおけるキリストの苦難の問題である。シュライエルマッハーはそれはキリストの神性から考えることではできないという。しかし、キリストの苦難の全てにおいて、神の和解の衝動を最も明白に認めるのである。そのようなキリストにおける神性の働きはキリストにおける神の愛でもある。

最後に両性の属性の交流についてである。シュライエルマッハーはこれは教義学の問題でなく、教理史に譲らねばならないと前提した上で論じている。

人性の属性の神性との交流に関して、神性を受難に適應せず、人間的なものと交わる神性は神性でない。それゆえキリストの受難において、キリストの神性にもそれを適應すべきだと信じられてきた属性の交流の教義は取り消さねばならない。というのは、交流によって各々の性が停止してしまふことになるからである。しかし、両性が離ればなれになったままであるなら、一つではありえない。そのような所論によってシュライエルマッハーは属性の交流説には否定的であった。このような所説はルター的でもカルヴァンの的でもなく、独自のようと思われる。

(新書判・九二頁・定価八四〇円(税込)・シャローム印刷)
 (くらまつ・いさお 東京神学大学理事長)

著者が最後まで心を傾けた『礼拝と音楽』連載を単行本化

バッハ万華鏡 川端純四郎

時代の激流に生きた教会音楽家

教会史や神学の視点からバッハを探索し続けてきた著者が、綿密な資料調査を元に分かりやすく語りかける、教会音楽家バッハとその周辺。著者の遺稿を緊急出版。

A5判・210頁・2730円

好評発売中

J. S. バッハ
 一時代を超えたカントーレ

川端純四郎

A5判・306頁・3,570円

愛とユーモアに溢れるメッセージ本

人生、一歩先は光
 はるな牧師のマンガ説法

春名康範 四六判・216頁・1,890円

読み返すたびに、深く心に沁み入り、新しい元気が与えられる四コママンガと温かいメッセージが、ハンデーになって再登場。

新装版

日本キリスト教団出版局
 〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18
 ☎03-3204-0422 ☎03-3204-0457
 E-mail eigyou@bp.ucci.or.jp(価格税込)
<http://bp-ucci.jp>

ほんとうの信仰問答とはこういうもの
上林順一郎 監修、かびばら マンガ
教会では聞けない「21世紀」
信仰問答Ⅰ
まずは基礎編



徳善義和

中学生の質問と牧師の答えという本を企画したことがある。「牧師先生って本当に暇なんですね。僕たちが教会にくるといつも相手になって遊んでくれる。牧師先生の仕事ってなんですか」などという、中学生の実際にあったいろいろな問いに答える企画だったが、残念ながら日目の目を見なかった。

この企画の基になったのはルターの『小教理問答』だった。その原点は、終始して「これ、なあに？ Was ist das?」というこどもの質問に父親から出発していた（これを私はドイツ語の論集に書いて、反響をいただいたが、日本語ではこれに即した解説と訳を『宗教改革著作集』第一四巻に載せた）。

だからキリスト新聞の第四面に「Q+A 教会質問箱」が始まって以来注目して、関心をもって愛読してきた。となりの「ただいま読書中」で取り上げられる本が失礼ながらほとんど私の興味を引かないのと対照的だった。「うん、そうだ、そうだ」と思ったり、「いい答えだな」と感心したり、「これはつまらないな」と思ったり、「私なら違う答えだな」と反論した

り、このコラムと私の問答にもなった。

これが『教会では聞けない「21世紀」信仰問答 まずは基礎編』という形でシリーズ化されて出版が始まった。その第一冊である。「第一章 教会に興味はあるけれど」「二六問」「第二章 通い始めてはみたものの」「一九問」「第三章 悩みはますます深まるばかり」「二〇問」の計五五問からなり、各章の始めには「かびばら」さんの漫画の二頁がある。それぞれの問いと答えが見開きの二頁に収まって、読み易い。それぞれに答えているのは計一三人、牧師あり、司祭あり、神学教師あり、大学宗教主任あり、臨床心理士あり、カウンセラーあり、精神科医ありと多彩である。答えが大上段に振りかぶった上から目線の答えでなくて、一緒に考えるタイプであるのがとてもいい。これで実際の対話が始まり、続けばいいのになあ、と思ってしまう。

私のところにはルーテルのいろいろな教会からの月報が届く。「洗礼を受けた方」の自己紹介も載る。「洗礼準備の時にキリスト教、聖書のことばかりでなく、いろいろなことを先生とお話

してきてとてもよかった」という声に眼が止まった。この教会の洗礼準備にはこの「質問箱」のような要素があるのだな、と感じた。こういう問いと答えが積み重なった上で、「神が私を造ってくださったことを、私は信じる」(ルター) や、「人生の目的とは神を知ることでありませう」(カルヴァン) のようなカテキズムの言葉をめぐって、一生にわたる信仰の学びが続くのである。

私はこの本をまず教会の牧師方に読んで欲しいと願う。また牧師と役員で共同の学びをして欲しい。こういう問答がごく自然に交わされるような教会、その上で一生の信仰の学びがあるような、伝統のカテキズムを生かす教会になって欲しいと思う。だからこの企画に大いに賛同しながら、「教会では聞けない」信仰問答となっているこの本のタイトル、それに応じた上林先生の「刊行の言葉」にも少し、「それは違うでしょ」という思いをもっている。こういう信仰問答が、教会だからこそできる

ような教会に私たちの教会はなっていないかなければならないのだろうと私は思っている。「こういう信仰問答ができる教会になるう」と私は呼び掛けたいのだ。

(とくぜん・よしかず) ルーテル学院大学・神学校名誉教授
(四六判・二三頁・定価一八九〇円(税込)・キリスト新聞社)



今すぐアクセス!



<http://www.bunnsyo.or.jp>

本のひろば ホームページ

●2013年1月号から前月号まで、ホームページで閲覧できます。

「キリスト教文書センター」のホームページから書評誌『本のひろば』をクリックしてください!

一般財団法人
キリスト教文書センター
〒162-0814 東京都新宿区
新小川町9-1
TEL・FAX 03-3260-6520

フィンランドの木造教会を訪ねて

小さな教会から世界一大きな教会へ



清重尚弘

先の出版『フィンランドの木造教会』（二〇一〇年、リトン）に続いて、より広い読者を対象にしたこの書が出版された。今回は、技術的な記述を思い切ってカットし、著者自身の手になる美しい写真、スケッチを豊富に掲載してある。写真一枚一枚が素晴らしく、「何よりも教会の素材さ、美しさ、木造の力強さを写真で表現」したいとの著者の述懐の通りに成功している。

北欧フィンランドの写真撮影は容易ではない。夏期はともかく、厳冬の氷点下一五度の中で待つこと数時間、「この一枚」のシャッターを切る瞬間をねらう著者の職人魂を感じる写真は、著者の心を遙かなフィンランドへと誘ってくれる。フィンランド紹介の写真集としても優れたものとなっている。著者の竹内皓氏は、一九八五年にルーテル教会のフィンランド訪問団に参加してその文化に魅了され、虜になった。先の著書は、先行研究のないこの分野へのユニークなチャレンジとして、日経新聞にも紹介されて、日本古来の木造建築の良さの見直しを世に問いかける意味でも反響を呼んだ。

著者はフィンランドの木造教会を生み育てた要因は、針葉樹林帯の豊富な木材資源、もう一つのカギは宗教で、国民の篤い

信仰が手作りの教会建築を要請し、信徒増加に伴う大規模礼拝堂の必要性から棟梁たちは自らの技術を磨き極めて行ったのだ、と考える（一頁）。

本書は六章からなり、序章は「フィンランドにおけるキリスト教の歴史」。十二世紀にフィンランドが西側の文化圏に組み込まれてキリスト教がもたらされ、当初は各地に小規模な石造教会が建てられた。十六世紀初頭に隣国との戦争が相次ぐ中で、城塞建造に石工職人が招集されて、教会建築は農家大工による木造へと移行した。

第1章「長方形教会」と呼ばれるタイプの時代の代表が、十七世紀建立のピユハマー教会。第2章「箱柱式」構法が生まれ、これがフィンランド固有の構法として以後の木造教会の技術発展の基となったと言う。「箱柱式」の解明こそ著者の学的業績であるが、説明は三八ページの図面付きの解説並びに前著の四二ページ以下に譲る。

第3章は、その後の長方形教会の変遷をたどり、第4章では、十八世紀に入ってスウェーデンの石造教会の影響で盛んに建造された十字形木造教会の時代。第5章のロシア自治国時代のケ

リマキ教会（七一〜七六頁写真）に至って、遂に木造でありながら五千人収容可能な大会堂を実現した。ここで使われた構法は日本の古い寺社建築と同じ手法だという（九四頁）。

本書に一貫するのは、フィンランド木造教会建築に携わった農家大工たちに対する著者の共感と畏敬の念、そして木に対する深い愛着である。「装飾は何一つなく、ただ差し込んでくる光が、校木の表面の斧で削られてできた波紋を浮き立たせています。木肌のぬくもりだけが伝わる、柔らかで優しい空気があたりを支配しています」（三九頁）とのコメントや、写真の短いキャプションにも著者の思いがにじみ出ている。

フィンランド人は帝政ロシアの圧政下で、また冷戦時代には両陣営の狭間で呻吟した。しかし、不屈のフィンランド魂（スーシー）を以て耐え抜き、ついに今日では最も安定、安全な社会へと成長発展を遂げた。

最初のフィンランド宣教師の来日は一九〇〇年で、なんとロ

シアからの独立（一九一七年）以前のことである。若い夫妻と三人の幼い娘。もう一人十七歳のクルヴィネン嬢。間もなく勃発した日露戦争下で九州を去り、東京を経て諏訪へ転進、森と湖のこの地に新たな伝道を開始、現在も諏訪でルーテル教会の活動が続いている。日露戦争に日本が勝利した故に、フィンランド人は今も日本びいきである。

著者は、この書を通してフィンランド理解者が生まれるように、さらに願わくはフィンランドを訪ねて著者同様に深い出会いの体験をするようにと、紹介した各教会の所在地、問い合わせ先、見学時期まで付し、巻末にはフィンランド語訳、英訳文を加えてある。

前著の巻末に「次なる旅たちを前にして」と記した著者の願いが成就したことは、友人の一人として喜びに耐えない。

（きよしげ・なおひろ九州ルーテル学院院長）
（A4判・一二二頁・定価四二〇〇円〔税込〕・リトン）



新刊

聖書学論集45

日本聖書学研究所編
●A5判並製 定価3150円

鉄は鉄を研ぐ
—箴言（ミシュレー）第II部、
第V部におけるレア（rēa' i）
加藤久美子

申命記史書におけるダビデ王朝
山我哲雄

エゼキエル書28章
11節〜19節におけるケルブ
山畑 譲

「福音にのつった殉教」による
インクルーシオ—『ポリユカルボ
ス殉教物語』の文学的考察
浅野淳博

聖餐の成立をめぐる
荒井 献

カイサレイアのアレタス『ヨハネの
黙示録注解』と10世紀のビザン
ツにおける終末意識について
飯島克彦

ヨハネ福音書における贖罪信仰
—文学的方法による分析
伊東寿泰

ルカ福音書17:20-21の解釈
—とくに ἡ βασιλεία τοῦ θεοῦ
ἐντός ὑμῶν ἐστίνをめぐる
本多峰子

「父の家」(神の家族Familia Dei)
—ヨハネ福音書における「家族」
メタファーとその意味
三浦 望

LITHON [リトン]

〒101-0061 千代田区三崎町2-9-5-402
FAX 03-3238-7638

既刊案内 (2013年6月～7月) (定価は税込)

著 訳・編 者	書 名	判型	頁	定 価	版 元	発 行 日
川 田 靖 子	我 は ま こ と の 葡 萄 の 木	四六	218	1,575	教 文 館	6/10
W.J.エイブラハム著 藤 本 満 訳	は じ め て の ウ ェ ス レ ー	四六	244	1,995	〃	6/20
明治学院大学キリス ト教 研 究 所 編	境 界 を 超 え る キ リ ス ト 教	A 5	346	3,675	〃	6/25
加 藤 常 昭	キ リ ス ト の 教 会 は こ の よ う に 葬 り、こ の よ う に 語 る	四六	272	2,625	日 本 キ リ ス ト 教 団 出 版 局	6/25
E.ローマイヤー著 辻 学 訳	聖 書 学 古 典 叢 書 ガ リ ラ ヤ と エ ル サ レ ム — 復 活 と 顕 現 の 場 が 示 す も の	A 5	160	3,150	〃	6/25
黒 川 知 文	歴 史 観 と キ リ ス ト 教	四六	260	2,625	新 教 出 版 社	6/1
深 井 智 朗	神 学 の 起 源 — 社 会 に お け る 機 能 《シ リ ーズ 神 学 へ の 船 出 3》	四六	226	1,890	〃	6/7
リチャード・ボウカム著 山口希生、横田法路訳	イ エ ス 入 門	四六変	210	1,995	〃	6/14
オードリー・サンスベリー・トークス著 松平信久、北條鎮雄訳	二 つ の 日 本 — 真 珠 湾 ま で の 10 年 間	四六	432	3,675	聖 公 会 出 版	6/10
上林順一郎 監修 かびばら マンガ	教 会 で は 聞 け ない 「21 世 紀」 信 仰 問 答 1 — ま ず は 基 礎 編	四六	132	1,890	キ リ ス ト 新 聞 社	6/21
日本ケズィック・コ ンベンション編	ケズィック・コンベンション説教集 2013 第 一 の も の を 第 一 に — 生 活・奉 仕・地 域 社 会	四六	188	1,300	ヨ ベ ル	6/1
ヴァルター・リュティ著 野崎卓道訳	主 の 祈 り 教 — 講 解 説	四六	232	2,100	新 教 出 版 社	7/1
笠 原 義 久	新 約 聖 書 入 門 — 新 教 新 書 275	新書	208	1,575	〃	7/1
マリオ・エスコバル著 八重樫克彦、八重樫由貴子訳	教 皇 フ ラ ン シ ス コ — 12 億 の 信 徒 を 率 い る 神 父 の 素 顔	四六	224	1,470	〃	7/1
辻 学	偽 名 書 簡 の 謎 を 解 く — バ ウ 口 な き 後 の キ リ ス ト 教	四六	233	2,310	〃	7/22
斎藤宗次郎/児玉佳典子著 児 玉 実 英 編	斎 藤 宗 次 郎・孫 佳 典 子 と の 往 復 書 簡 — 空 襲 と 疎 開 の は ざ ま で	四六	386	3,150	教 文 館	7/21
パスカル 著 田 辺 保 訳	キ リ ス ト 教 古 典 叢 書 キ リ ス ト 教 古 典 叢 書 セ	A 5	788	5,460	〃	7/25
佐々木勝彦	わ た し は ど こ へ 行 く の か — 自 己 超 越 の 行 方	四六	312	1,890	〃	7/30
春 名 康 範	人 生、一 歩 先 は 光 — は る な 牧 師 の マ ン ガ 説 法	四六	216	1,890	日 本 キ リ ス ト 教 団 出 版 局	7/19
川 端 純 四 郎	バ ッ ハ 万 華 鏡 — 時 代 の 激 流 に 生 き た 教 会 音 楽 家	A 5	210	2,730	〃	7/25
磯 部 隆	ロ ー マ 帝 国 と イ エ ス・キ リ ス ト	四六	473	2,730	新 教 出 版 社	7/24
栗林輝夫、大宮有 博、長石美和著	シ ネ マ で 読 む ア メ リ カ の 歴 史 と 宗 教	A 5	204	2,520	キ リ ス ト 新 聞 社	7/25

書店名	郵便番号	住所	電話	ファックス	URL	メール	郵便振替
北海道キリスト教書店	060-0807	札幌市北区北七条西6丁目	011-737-1721	011-747-5979	http://www.jp-shop.com	sasaki@jp-shop.com	02770-2-56520
善隣館書店	020-0025	盛岡市大沢川原3-2-37	019-654-1216	共用	http://www7.ocn.ne.jp/~zen-book/	zenrinkan_syoten@yahoo.co.jp	02350-0-874
仙台キリスト教書店	980-0012	仙台青葉区1-136 敷島センター17号F	022-223-2736	共用		fcqwk524@ybb.ne.jp	02230-0-31152
恵泉書房	260-0021	平新町短箱22 千葉カシヤセンタービル	043-238-1224	043-247-3072		keisen@vesta.ocn.ne.jp	00120-9-43619
教文館	104-0061	東京都中央区銀座4-5-1	03-3561-8448	03-3563-1288	http://www.kyobunkwan.co.jp	xbooks@kyobunkwan.co.jp	00120-2-11357
聖公書店	162-0814	東京都新宿区新小川町9-1	03-3235-5681	03-3235-5682	http://www/seikokai-pub.jp/	netk-bookshop@company.email.ne.jp	00140-8-50880
アパコ・ブックセンター	169-0051	東京都新宿区西早稲田2-3-18	03-3203-4121	03-3203-4186	http://www.avaco.info	avaco@avaco.info	00130-0-96398
待農堂	167-0053	東京都杉並区西荻南3-16-1	03-3333-5778	03-3333-6378	http://members3.jcom.home.ne.jp/taishindo/	taishindo@jcom.home.ne.jp	00110-8-95827
キリスト教書店ハンナ	162-0814	東京都新宿区新小川町9-1	03-3269-4490	03-3269-4491		kirisu@youstotenhanna@ybb.ne.jp	00150-9-595509
バイブルハウス青山	107-0062	東京都港区南青山5-10-2	03-6418-5230	03-6418-5231		biblehouse@bible.or.jp	
横浜キリスト教書店	231-0063	横浜市中区花咲町3-96	045-241-3820	045-241-5881	http://www.biglobe.ne.jp/~yokohama.cs/index.html	sksch@mva.biglobe.ne.jp	00250-4-2512
清光書店	951-8114	新潟市営所通一番町313	025-229-0656	共用			00680-8-47
静岡聖文舎	420-0812	静岡市葵区古庄3-18-12	054-264-0264	054-264-4416		info@s-seibun.co.jp	0810-8-26558
名古屋聖文舎	464-0850	名古屋千種区今池5-28-4	052-741-2416	052-733-2648	http://homepage3.nifty.com/seibunsta/	nagoya-seibunsha@nifty.com	00810-5-14073
京都ヨルダン社	602-0854	京都市上京区荒神口通河原町東入ル	075-211-6675	075-211-2834		ktjordan@inbox.kyoto-net.or.jp	01010-2-594
大阪キリスト教書店	530-0002	大阪市北区曽根崎新地2-1-15	06-6345-2928	06-6345-2187	http://www11.ocn.ne.jp/~osakacs	ochtbok@river.ocn.ne.jp	00990-3-43009
堺キリスト教書店	591-8044	堺市北区中長尾町2-1-18	072-257-0909	072-253-6132		sakai-x@topaz.plala.or.jp	00960-9-47426
神戸キリスト教書店	650-0021	神戸市中央区三宮町3-9-18三陽ビル2F	078-331-7569	078-331-9833			01150-7-45120
広島聖文舎	730-0016	広島市中央区鞆町7-28	082-228-4914	082-223-0951			01360-4-1958
徳島キリスト教書店	770-0052	徳島市中島田町3-57-1	088-633-6335	共用	http://www6.ocn.ne.jp/~tcs/	tokushoten@shrit.ocn.ne.jp	01630-5-37119
松山キリスト教書店	790-0804	松山市中一町1-23	089-921-5519	089-921-5413		sksch@dokidoki.ne.jp	01650-1-2120
北州キリスト教ブックセンター	802-0022	北九州小倉北区上富野5-2-18	093-967-0321	共用	http://kcbook.net/	kcbookcenter@ybb.ne.jp	01780-4-39965
新生館	810-0073	福岡市中央区舞鶴2-7	092-712-6123	092-781-5484			01750-5-10932
キリスト教書店ハレルヤ	862-0971	熊本市大江4-20-23	096-372-3503	共用			017304-45044
沖縄キリスト教書店	901-2134	浦添市港川2-25-1	098-877-7283	共用	http://www.okinawacbs.com/	okinawacbs@yahoo.co.jp	020308-1283
エマオ・BOOKセンター	904-0004	沖縄市中央3-14-2	098-929-3776	共用	http://www.okinawacbs.com/	emacbs@yahoo.co.jp	

新教出版社

福音と世界

2013年10月号

特集 アメリカと天皇制

国民国家と天皇制…………… 河西秀哉
神の国アメリカ…………… 藤井創

菅孝行

「神国日本」…………… 磯前順一

国民国家という幻想を越えるために…………… 石川裕一郎

憲法の忘却／忘却の憲法…………… 水野隆一

書評Ⅱ 長谷川修一 『聖書考古学』…………… 横田耕一

好評連載中！
〈自民党改憲草案を読む〉

天皇あつての日本国家…………… 横田耕一

A5判・80頁・本体571円・〒68円
年間予約購読料〒共8,016円（消費税込）

偽名書簡の謎を解く

辻 学著



パウロの名を付した「第二パウロ書簡」は偽名書簡である！
なぜ書かれたのか、それぞれの主張やねらいは？最新の研究に基づき、その謎を解き明かす！

◎四六判・233頁・定価2310円

〒162-0814 東京都新宿区新小川町9-1
TEL: 03-3260-6148
FAX: 03-3260-6198

編集室から

「所有は最悪の束縛。」もう何年も前に読んだ小説の主人公の台詞に、いくつも思い当たるところを感じ、今でも衝撃を抱いている。

そして連鎖するように別の本で読んだ、「人は旅人でなければならぬ」という言葉を思い出す。人生は軽やかに、持ち物は鞆に収まる分だけで良い。いつでも旅に出かけられるように。二つの事柄はさらに私の中で、聖書の「空の鳥野の花」の教えへとつながっていく。

『旅の絵本Ⅱ』（安野光雅画／福音館書店）を読んだことがあつた。何度も版を重ねている本なので、ご存知の方もいらっしゃると思う。文字のない絵だけで構成されている本だけれど、絵は語る力を充分もっている。

俯瞰から眺める町並みと行き交うたくさんの人物、そして旅人。丁寧に観ていくと小さなスペースではあるが、必ず一画面のどこかに、イエス・キリストを表す絵を見つけてことができ

る。さらに注意して観ていくと、ページをめくることにストーリーが展開されていき、一冊でキリストの生涯が綴られていることに気づく。

一見何の変哲もない風景。見過ごしてしまっても支障をきたさない。知っている人、探している人、望んでいる人、あるいは、待っている人だけに特別な風景となつて現れる。

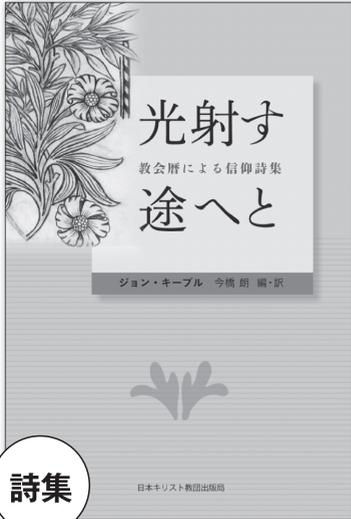
見つけ出すという行為は、旅をしているときの、一期一会を大切に感じる感覚に似ているような気がする。

もしかしたら、日々の些細な不安に捉われている時も、本当はいろいろなか所で、イエスさまの気配に遭遇しているのかもしれない。

日常生活の営みに溶け込むように描かれる『旅の絵本Ⅱ』のイエスさまは、見つけた瞬間、心がほのかな喜びに満たされていることを感じる。

（吉崎）

教会暦に沿って編まれた、信仰の世界へと誘う美しい詩31編



詩集

光射す途へと

教会暦による信仰詩集

ジョン・キープル 今橋朗 編・訳

「わが魂のひかり」(『讚美歌21』214番)の原詩も取められた詩集『教会暦』から精選。キリスト者の1年を辿り、詩から聖書へ、聖書から祈りへ、生涯を導く恵みを味わう。

◆四六判 上製・194頁・2,310円

ローティーン向け伝記シリーズ

ひかりをかかげて **岩村 昇**
ネパールの人々と共に歩んだ医師

第5回配本

田村光三



◆A5判 並製・114頁・1,260円

多くの出会いや人々の温かさに触れながら、「みんなで生きるため」、公衆衛生医として、18年の歳月をネパール医療に捧げた岩村の生涯。

聖書の物語論的読み方

新たな解釈へのアプローチ

J・L・スカ
佐久間 勤 / 石原良明 訳

本邦初、聖書を物語として読む新たな方法論を紹介した概説書。「時間」や「プロット」といった観点から、近代の小説分析方法を聖書の物語に適用する。

◆A5判 上製・210頁・3,150円



『ハイデルベルク信仰問答』入門

L・D・ビエルマ編 吉田隆訳

資料・歴史・神学

四五〇周年記念出版!

●3,360円



ハイデルベルク信仰問答の歴史的・神学的背景、執筆者問題、そして翻訳史などをまとめた労作。日本で初めて紹介される本格的な研究書。

ハイデルベルク信仰問答と日本の教会

講師 吉田隆氏 「ハイデルベルク信仰問答の神学的特質」
講師 加藤常昭氏 「説教のパックボーン、ハイデルベルク信仰問答」

レスポндаー 楠原博行氏、郷家二三氏、宮井岳彦氏

日時 2013年9月30日

10時30分~16時 (開場10時)

場所 キリスト品川教会

入場料 1,000円

後援 日本FEBIC、新教出版社、日本基督教団出版局、麦出版社、いのちのこば社出版部、キリスト新聞社



9月の新刊のご案内

旧約聖書文学史入門

K・シユミット

山我哲雄訳

●4,720円

多様性を理解するためのアプローチ
旧約聖書のテキスト群を時代区分・類型によって文学的に特徴付け、成立過程と相互連関を解明する意欲的な試み。現代旧約学を代表する基礎文献として必読の研究。



松居友氏の三部作! ●各、470円

わたしの絵本体験



元絵本編集者が語る、子どもの生きる力を育む昔語りと絵本の読み語りの大切さ。

昔話とこころの自立



生きる知恵や勇気を語り伝える昔話。子どもと共に親も成長するためのヒントを昔話に探る。

昔話の死と誕生



なぜ人間は昔話を語り伝えたか。哲学や深層心理学を交えて昔話の宇宙像を展開し、やさしく解説。

一九五七年七月一日 第三種郵便物認可
二〇一三年一〇月一日発行 (毎月一回一冊発行)
本のひろば 第六九九号 二〇一三年一〇月号

発行所 〒104-8544 東京都中央区新小川町九一-1 一般財団法人キリスト教文書センター
電話 03-3133-6060 振替 00117-0151-12679
発行人 本村利春 編集人 寺田彰 印刷所 (株)平河工業社
発売所 日本キリスト教書販売株式会社 電話 03-3133-6060 15679

定価七五円 (税抜七二円) (〒60円)
一年分一三〇〇円 (送料共)



教文館

〒104-0061 東京都中央区銀座4-5-1 TEL03-3561-5549

本のご注文は (e-shop 教文館)へ! <http://shop-kyobunkwan.com/>

e-shop 教文館